

第 127 回院内集会

福島原発行動隊の7月院内集会は、大熊町で、町への移住者を支援するなど各種の活動に当たっておられる南場優生海さんを講師に迎えて以下のように開催しました。【わがふるさとへの想い】と題するシリーズ講演の2回目です。平均して五、六十歳だった集会講師が二十歳台となるのは初めてです。いつものようにウィークデイの昼間ではなく、週末土曜日の夜7時からの開催となったのも、講師が現役でご多忙な毎日であるためでした。

○日時:2023年7月22日(土曜)19:00-20:00

○開催方式:オンライン(ZOOM)

○テーマ:【わがふるさとへの想い】2

○講師:南場優生海(ゆうみ)さん

1995年 大熊町生まれ <移住サポーター>等

2011/3/11、15歳、大熊町中学校卒業式の日に関東大震災に被災。祖父らとともに先ず隣の田村市に避難。いわき市の高校に。2020年に大熊町に戻り、町への移住者との相談、町の様子を知らせるツアーガイドなど各種の地域活動に携わる。

●東日本大震災のとき、どこで何をしていたか。

私は地元大熊中学校3年生で、その日は卒業式の日でした。午前中は卒業式。午後は近くの6号線沿いにあるカラオケボックスに友達15人ほどで行き、高校合格通知を受けていた友達の合格祝いを兼ねてカラオケを楽しんでいました。そこで地震に遭いました。

携帯のアラートが鳴り響きいつまでたっても揺れが止まらず、カラオケ店の窓ガラスが割れたりしてカラオケ店の店員の指示でみんな表に出ていきましたが、そのときには、それほどのことではないとも思っていました。

知り合いの方の車で原発から4キロの自宅まで送っていただき、その日、3月11日は、祖父母、両親と私の一家5人家でやすみました。翌3月12日の朝、町内のアナウンスで避難しなければならないことが分かりました。バスが用意されていましたが、祖父母の健康上のこともあり、自宅の車で避難することにしました。9時頃に家を出ましたが、大変

SVCF 通信 : 第 160 号 2023 年 7 月 28 日

な渋滞で、その中を大熊町に隣接する田村市に向い、田村市の体育館で避難生活に入りました。



●避難生活

田村市の体育館にいる間、祖父は健康上の問題などもあってそこにはいられなくなりました。祖父母は神奈川の親戚が引き取ってくれて、以後家族3人で約3週間そこで暮らしました。

私が受験をしていたいわき市の高校から合格の通知が来ましたので、いわき市に移って高校生

活を送ることになりました。いわき市の知り合いがアパートを用意してくれました。移った当初は着るもの、家具等がなくて不自由をしましたが、父の友人らが助けてくれました。

高校卒業後は仙台の大学に入って、私一人仙台に。私は地元で先生をすることが希望でしたので、教育学部で入りました。

●大熊町に戻って

2018年に仙台の大学を卒業して教員となりましたが、私にはこの仕事が合っていないことが分かり2019年夏にやめました。そして大熊町に戻り、2020年から大熊町町役場で仕事を始めました。

私の部署は復興の関係でしたが、町の職員という立場では、自分がやりたくてもなかなか挑戦できないことが多かったため、ただの町民として町を盛り上げたいと考え、役場をやめました。

その後、県のやっている移住者サポートの事業に加わり、現在は移住者のための大熊町ツアーのガイドなどを行っています。

●ツアーガイドとは

移住希望者がいきなり大熊町に住んで生活に入るというのはとてもハードルの高いことです。だから、初めは大熊町暮らしの様子をみてもらい、また県からの要望もあって大熊町で労働体験などをしていただくということで、ツアーの午前中はイチゴ栽培などを行っているくネクサスファームおおくま>というところでパートタイマーとして体験していただく。お昼は町内の食堂などで摂って、午後は町内の主要施設をまわって見学してもらう—そんなように行っています。

参加者は「6人以下」ということになっていますが、実際には4人。ふたりということもあります。

●移住者サポートの成果、移住実績は

昨年以来これまでに5回のツアーを行いました。ツアー参加者延べ6人のうち、2人の方が移住をされました。1人は秋田の方、もう1人は修士論文の研究テーマの関係で大熊町に来ていた大学院生だったひとで、卒業後社会人として大熊町に住むことを決められました。いまは、町でアルバイトをしながら建築関係の仕事をさがしておられます。

SVCF 通信：第160号 2023年7月28日

私の身近なツアーガイドをしている人たちの関係でいうと、自分の同世代の女性が10人ほど移住しています。

●毎日大変お忙しくしておられるが、他にはどんなことを

生まれ育った大熊町が活性化していくことを目指して、移住してきた方たちと地元のひとたちがスムーズにつながっていくためのお手伝いするといったことがあります。知り合いのおじさんがやっている畑で雑草取りやトマトなど野菜作りなどを一緒にしながら、大熊町を楽しんでいただく機会を作っていくようにしています。

もう一つは、女性の仲間たちとの活動で、職場が町内ではない人も含め、何をしゃべってもいいということでLINEでつながった大熊女子のグループが40人ほどになっています。町の職員、農業者、バーテンダーなどいろんな業種の、みんなとても元気なひとたちで、野菜作りをいっしょにしたり飲み会をしたりして、町の活性化を進めていこうとしています。

●これからの計画

「大熊町でハッピーに暮らす」ことを目指して、何よりも自分自身が楽しんでいなければ、来ていただくひとたちも楽しんでもらうことができないので、私自身が楽しんでいくためのイベントとかを考えています。

【質疑】

行動隊員(K) 帰還される大熊町はなかなか難しい状態であったと思いますが、戻りたいと思われたきっかけになったのはどういうことでしたか。

南場(N) 大震災とは関係なく小さい頃から地元で働きたいと思っていて、双葉郡で先生をすることを元々考えていたので戻ることになり、役場で働き始めました。

K 廃炉事業などの情報などは来ていますか。

N 廃炉事業の情報誌などが出ていますが、私自身は恥ずかしいぐらいに原発の情報などは見えていません。

K 行動隊のホームページに廃炉の進捗状況について毎月「イチエフウォッチャーレポート」を掲載しています。気が向いたら見て下さい。

N ありがとうございます。

K 福島第1原発が地震などで再度の事故を起こすリスクをどのように考えていますか。

N 「不安はないのか」ということですが、実際に住んでいて不安を感じてはいません。「危なくないか」と外から言われることもあります。町での生活があまりに楽しくて、不安を忘れ全く怖くはありません。

K 困っていること、不足していることは。

N うーん。帰還していない人、あるいは東京の人たちから「大熊町は怖いところではないのか」と言われたりすること、そうしたイメージが拭えないことが、困っているといえれば困ったことです。

K いったん職に就いた役場を離れられたのですが、また役場に戻られたらどうですか。かつて役場務めをされているように様々な経験をされていることが、町政を改革するのにとても役に立つと思います。言葉遣いなどで役場の仕事が自分に合わなかったということもあったようですが、役場に戻って南場流の言葉遣いで仕事をされていくことで、役場の仕事を変えていかれたらどうでしょう。

N 町は、良くも悪くもいったんはゼロなってしまいました。ゼロからの町作りをしているわけで、そうした中で人と人をつなげていくようなことを、町職員ではなくただの町民の立場でやっていきたい。

K 大熊町を楽しい町にしていくというご活動を支援するため、移住者サポートツアー等についての情報発信に加わってほしいと思います。

万死に値するガチャン

安藤 博

この6月末、川内ワイナリーの作業場で行動隊メンバー4人が作業中、わたくしの頭にあったのはワシントンのシンクタンク、戦略国際問題研究所(CSIS)が行った「台湾有事のシミュレーション」(#)でした。「決定的な中国の敗北とは判断されないが、中国に不利な膠着状態となる」という分析結果です。福島の中山間地から遙かに遠い台湾に頭が飛んでいたのは、「何をするにも行動中のミス、損耗は避けられない、このワインボトルを動かす作業でも」との思いからです。鋳物、焼き物、裁断等のモノ作りだと、作業で出てくる不良品をおしゃかと呼んでその発生率を10,000個に1とか2と想定しそれを製造原価におりこむ。軍事作戦でも、動員する兵力に対する損耗率を10,000人に1人、2人と推算して作戦の当否が計られる。かわうちワイナリーの作業でも、ワインのボトルを段ボール箱から出したり入れたり作業の中で、10,000本に2本？3本？…



箱詰めするワインボトルの下部に、オシメのように履かせる発泡スチロールのクッションを用意する山田行動隊長と加藤、高橋隊員ら。この後ガチャンの惨劇が起こる。

「ガチャン」の音で我かえると、手元狂って床に落としたボトルの破片が広がり白ワインの芳香が広がっていました。川内村役場から出向しているワイナリー職員らが手早く床拭きモップなどで事故処理をするのを見ながら、犯した不始末の大きさに、

身の縮む思いです。

昨 2022 年から製品出荷が始まった川内村のワイン事業は、赤子がハイハイからようやく立ち歩きし始めたくらいの状態です。1 本 1,000 円以下でも十分楽しめるチリや南アフリカ、オーストラリア産に対して安売りではとても太刀打ち出来ないので、3,100-3,600 円の“中級品”として売っているけれども、産出量がまだ少ない事から、この値段でも原価割れすれすれです。

現地の宿泊所で、夕食をともにしながらの打ち明け話でワイナリー関係者が語ったところによると、収支が厳しい事から手元資金が詰まってきていて、悪くすれば従業員の給与遅配に陥りかねない。窮余の増資で、とりあえず資金不足をしのご事も考えられているとの事です。

そんな苦しい状況下、ガチャン 1 本で 3,000 円余を飛ばしてしまった非は、正に万死に値します。福島復興支援事業としてこの 7 年やってきたことのすべてを、帳消しにしてしまうほどの大きなミスです。

どうしたらいいでしょう。行動隊の行動指針は「技術・技能を持った人びとの自発的参加によって、福島第一原発事故の早期収拾を図る」(定款第 4 条「目的」)というのですが、ガチャンを起こさない「技術・技能」などあるわけがありません。

せめてものこととして考えられるのは、以下のようなことです。福島での行動に加わる行動隊メンバーに対して、コロナ下で行ってきた「行動日から三日以内に行われたコロナ陰性証明を携帯すること」に加えて、「作業先地域の企業者等に、器物/設備等損壊による損失を与えた場合は、当該損壊物/設備の弁済に可能な限り努めること」を行動参加の条件として課すことです。

戦略国際問題研究所

アメリカ合衆国のワシントン D.C.に本部を置くシンクタンク。1962 年にジョージタウン大学が設けた戦略国際問題研究所 (CSIS) が、後に学外組織として発展したものである。現在のフルタイム常勤職員は 220 人。

全世界のシンクタンクをランク付けしたペンシルベニア大学によるレポート (Go to think tank index の 2014 年版)によれば、CSIS は防衛、国家安全保障 で世界第 1 位、外交政策、国際関係論で第 5 位とされている。

【台湾有事シミュレーション】は、以下のように米、中と台湾、日本も合わせた多大な兵力/兵器の消耗を想定している。

「2026 年に、中国が台湾に武力侵攻が始めたとする。米軍は、原子力空母 2 隻、ミサイル巡洋艦などの艦船 7~20 隻、死傷者約 3000 人、行方不明者と合わせて約 1 万人、航空機 168~484 機を失う。日本の自衛隊は中国から攻撃を受けた場合に参戦し、軍用機 112~161 機と艦船 26 隻を失う。台湾軍は航空機の半数以上とすべての艦船 26 隻を失う。中国軍は、航空機 155~327 機、艦船 138 隻、地上での死傷者 7000 人以上、加えて海上で約 7500 人が死亡する」



【行動隊 8 月スケジュール】

●院内集会

8 月 18 金曜日 11:00-12:30(予定)

「わがふるさとへの想い」3

●SVCF 通信発行

8 月号 25 金曜日

●連絡会議

以下の各金曜日 10:30-

4、11、18、25

SVCF 通信 : 第 160 号 2023 年 7 月 28 日

